

なら歴史芸術文化村
滞在アーティスト誘致交流事業
ドキュメント2022



Artist in
Residence
Documents
2022

Nara Prefecture
Historical and Artistic Culture Complex

Contents

目次

06 ごあいさつ

07 Preface

09 | 前期 | 中尾美園

10 プロローグ

12 タイムライン

18 展覧会 | 「ある家の図譜」

24 批評 | 中村裕太「安心な図譜」

31 | 後期 | 大西健太郎

32 プロローグ

34 タイムライン

44 ダンスパフォーマンス公演 | 手レよむダンス「霧、こんとんとたって」

50 対談 | 伊藤亜紗(美学者)×大西健太郎「分からないから、愛おしい身体」

付録

55 審査員講評

56 2022年度 OPEN CALL 滞在アーティスト募集要項

59 なら歴史芸術文化村について

Nara Prefecture
Historical and Artistic Culture Complex

Artist in Residence
Documents 2022



ごあいさつ

「なぜ？」が芽生える。「知る」を楽しむ。

歴史文化資源の継承と活用、芸術文化活動振興の拠点施設として『なぜ？』が芽生える。『知る』を楽しむ。」をテーマに令和4年3月21日に開村したなら歴史芸術文化村では、来村者との交流を重視し、一人ひとりの感性や知識、関心に寄り添い、自発的な学びを支える取り組みを行っています。

当施設が所在する天理市では、平成30年度より、アーティストを誘致し、市民がアートに触れる機会を創出するなど「芸術文化に出会える街」として先行的な取り組みを展開してきましたが、なら歴史芸術文化村開村を機に、「なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業」として継承し、さらなる発展を目指すこととなりました。

アーティストがなら歴史芸術文化村を拠点とした制作活動を行いながら、人々がアーティストや作品と触れ合うことで新しい感性を導き出し、交流することで社会をつなぐプラットフォームになることを目指しています。天理市、天理大学、桜井市（オブザーバー）と共に実行委員会を構成し、なら歴史芸術文化村近傍に限らず、関連する地域にも連携の輪を広げながら事業展開してまいりました。

全国様々な地域から応募いただき、55名の中から選考された中尾美園と大西健太郎の2名には、滞在制作を通して、なら歴史芸術文化村で活動する文化財継承の担い手をはじめ、来村者や地域で様々な活動をされる方々とも交流をいただきました。これらの機会は、奥深い奈良の魅力や、芸術文化の素晴らしさ等をテーマに「なぜ？」が芽生え、「知る」を楽しむことができる、双方にとって貴重な機会となりました。

三原耕治（なら歴史芸術文化村 村長）

Preface

Growing the seeds of inquiry. Making learning fun.

Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex opened March 21, 2022, as an institution committed to passing on and utilizing our historical and cultural resources, and promoting artistic and cultural activities under a slogan of growing the seeds of inquiry and making learning fun. The complex's programming emphasizes interaction and exchange with visitors, facilitates individual sensibility, knowledge, and interests, and fosters spontaneous learning.

Located in Tenri, which launched its own initiative from 2018 as a "city for encounters with arts and culture," inviting artists and creating opportunities for citizens to come into touch with art, Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex aspires to continue and take those previous efforts further through its own artist residency program.

The program aims to form a platform for artists to undertake work while based at the complex, and for drawing out new sensibilities and building links with the community by bringing people into contact with artists and their work. With an executive committee comprising Tenri City, Tenri University, and Sakurai City as an observer member, the residency is developing and expanding partnerships not only in the immediate vicinity of the complex but also in other related areas.

We received fifty-five applications from all over Japan, which we narrowed down to Mien Nakao and Kentaro Onishi. Over the course of their residency, they interacted not only with those involved in historical and traditional arts and culture at the complex, but also general visitors and others engaged in various activities in the region. The program was a mutually valuable opportunity for growing the seeds of inquiry and making learning fun in terms of the profound appeals of our prefecture and the splendor of arts and culture.

Koji Mihara

Director, Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex

Nara Prefecture
Historical and Artistic Culture Complex

Artist in Residence
Documents 2022

Mien Nakao

| 前期 | 中尾美園

Prologue

プロローグ

滞在前の数日間、娘の保育園が新型コロナウイルスの感染対策で休みとなり、荷造りが進まず、私は困っていました。滞在中もメールで送られてくる園関係者の感染情報に怯えながらも、出産後に初めてまとまった制作時間が得られたことに喜びつつ、家を不在にすることの不安を抱えたまま、なら歴史芸術文化村での滞在がはじまりました。

そんな私が滞在中に描いたのは、家の絵でした。家といっても、私自身の家ではなく、他人の家のしかも解体してバラバラになった断片です。2018年に解体されたその家は、戦後に建てられ、かつては学生の下宿も営んでいて、部屋数が多く、人がよく集まる大きい普通のお宅だったそうです。解体の時、私は屋根や柱の構造材や、各部屋の壁や床や家具などから、できる限り均等に選び出して採取しました。その後は段ボールに入れて自宅で保管していました。なら歴史芸術文化村の滞在初日、その採取した家の断片を荷ほどきして全部ならべると、制作スタジオが家の瓦礫で埋まったようになりました。

制作は、この家の断片を整理していく作業から始めていきました。まず保存・管理しやすいように、ノコギリなどで小さく四角く切り出してから、それを和紙に描きうつしていきました。制作の合間に、なら歴史芸術文化村の修復工房に見学に行ったり、絵画、彫刻、工芸、考古それぞれの専門家の方と交流したり、他の博物館施設に見学に行ったりしながら、そこ得られた気づきを制作に反映させました。例えば、民俗資料を取り扱う方から、整理

Mien Nakao

番号の重要性を伺い、家の断片一つずつに番号を振り、調査票に記録を取り、整理番号を記載した紙片を物に貼りました。仏像彫刻の学芸員の方からは、文化財を養生するためのクッション（綿布団）の作り方を教わり、整理した後の家の断片は綿布団の上に置いてスタジオに陳列することにしました。

ところで、なら歴史芸術文化村内の文化財修復工房は、壁の一面がガラス張りになっていて、一般の見学者が中の作業を見ることができます。私が制作を行ったスタジオもガラス張りだったので自然と公開制作となりました。

展覧会は、このガラス越しにみる行為の連続性にヒントを得て、なら歴史芸術文化村の文化財修復・展示棟とスタジオのある芸術文化体験棟の二会場で行いました。文化財修復・展示棟では地下の見学スペースに、描きうつした絵をガラスケースに入れて展示しました。一方の芸術文化体験棟のスタジオには、整理する前と後の「家の断片」の実物や、断片を切る映像、作業機を配置し、公開制作で行ってきた過程を再現する展示構成にしました。鑑賞者や見学者はガラス越しに作業をみる行為を自然と繰り返すことで、文化財と家の断片を重ねてイメージすることができます。家の断片に郷愁や親近感を抱きつつも、未来にわたる長い時間の経過に思いが至るのです。歴史は情報の断片をつなぎ合わせた「解釈」です。経年により淘汰されていく情報として、日々の暮らしの中のささやかな物語を想像する時、目線の先がずっと遠くの地平へ、後ろにも前にもひらかれていくような気がするのです。

中尾美園

Timeline | タイムライン

8.02 | tue. 文化村^{*1}に到着。施設スタッフと挨拶の後、芸術文化体験棟を見学。荷ほどきをして、スタジオ303に家の断片を並べる。



8.03 | wed. アーティストとプロジェクトチームで滞在中のスケジュールについて、打ち合わせを行う。文化財修復・展示棟を見学。スタジオ303で和紙のドーサ引き^{*2}を行う。

8.04 | thu. 下描きを始める。

8.05 | fri. 本紙に家の断片を描き始める。

8.06 | sat. 文化村の学芸員に綿布団の作り方を教わる。

*1 || 文化村 | なら歴史芸術文化村の略。以降、タイムライン上では略名で記載。

*2 || ドーサ引き | 膠(にかわ)等を混ぜた液を紙・布などの対象物に塗布する作業。

8.09 | tue. 奈良県知事、奈良県議会議長を表敬訪問。

8.10 | wed. 天理大学附属天理参考館^{*3}を訪問。学芸員の幡鎌真理さんに収蔵品の説明を受けながら、ラベリングの方法や収納方法について教わる。



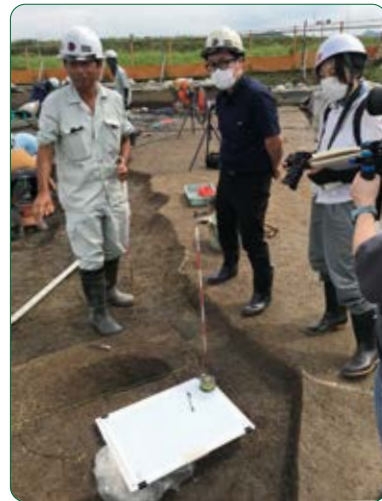
8.16 | tue. 天理市長を表敬訪問。

8.19 | fri. 文化財修復・展示棟の見学ツアーに参加。修理技術者が、白っぽいシャツや作業衣を着ているので、以降、アーティストも白いシャツを着るようになる。文化財修復・展示棟地下1Fで作品展示をすることが可能か、施設担当者と打ち合わせを行う。結果、修復工房内であれば絵画作品の持ち込みは可能という返答があった。

*3 || 天理大学附属天理参考館 | 1930年開館。現在は約30万点にも及ぶ世界中の様々な生活資料や貴重な遺物を収蔵する博物館となり、一般に広く公開している。

8.26 | fri.

奈良県立橿原考古学研究所^{*4}の施設内と発掘現場にて、実測^{*5}の作業を見学。保管における註記方法、収納方法などを教わる。発掘担当者（情報を拾う人）のフィルターの網目についてのヒントを得る。隣接する奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で展覧会を鑑賞。その後、歴史に憩う橿原市博物館^{*6}で博物館学芸員の実習生とともに、発掘調査の理念や展示作業、落下防止用テグスの掛け方などを教わる。



*4 奈良県立橿原考古学研究所 | 奈良県橿原市畝傍町に設置された県立の埋蔵文化財調査研究機関。現在まで存続している公的な埋蔵文化財研究機関としては最も古い歴史を持つ。

*5 実測 | 出土した遺構を計測して実寸で図化した成果図面。

*6 歴史に憩う橿原市博物館 | 1978年に開館した橿原市千塚資料館を改修し、2014年にリニューアルオープン。橿原市に現存する貴重な文化財の保護と活用に取り組む。

8.27 | sat.

展覧会フライヤーに掲載するコンセプトテキストが校了し、展覧会の骨子が固まる。

8.28 | sun.

26日のリサーチをふまえて展示台を自作し、スタジオ303の展示スペースの様態替えを行う。

8.29 | mon.

展覧会フライヤーに使用する写真を撮影。



9.12 | mon.

家の断片を切る様子を撮影。



9.15 | thu.

記録映像用のインタビューを撮影。展覧会フライヤーが納品される。

9.16 | fri. アーティストとプロジェクトチームで作品搬入の打ち合わせを行う。

9.20 | tue. 展覧会会場である芸術文化体験棟 3Fと、文化財修復・展示棟 地下1Fへ作品を搬入。その後、キャプションを制作。

9.21 | wed. 展覧会「ある家の図譜」オープン。

9.22 | thu. 文化財修復・展示棟の考古遺物修復工房にて、接着や収納の方法、隙間を埋めるための材料などを教わる。アーティスト自身が制作中に割ってしまった家の断片である瓦を、教わった方法で修復し、展示に追加。



9.25 | sun. アーティストによるガイドツアーを開催。



9.26 | mon. 文化財修復・展示棟の仏像等彫刻修復工房と、絵画・書跡等修復工房を見学。仏像の補彩や後補についての技法や記録方法、打紙や保管箱などについて教わる。

10.01 | sat. 親子向けワークショップ「モフモフの図譜」開催（参加者：親子6組、対象年齢5歳以上）。子どもの頃、よく眠るために手放せない毛布、ずっと触り続けてヨレてしまったタオル、ぬいぐるみなど、何だか温かくて、心地のよいもの。それらは「ライナスの毛布」や「移行対象」と呼ばれている。そんな宝物を、一枚の絵に日本画の絵具で描いた。



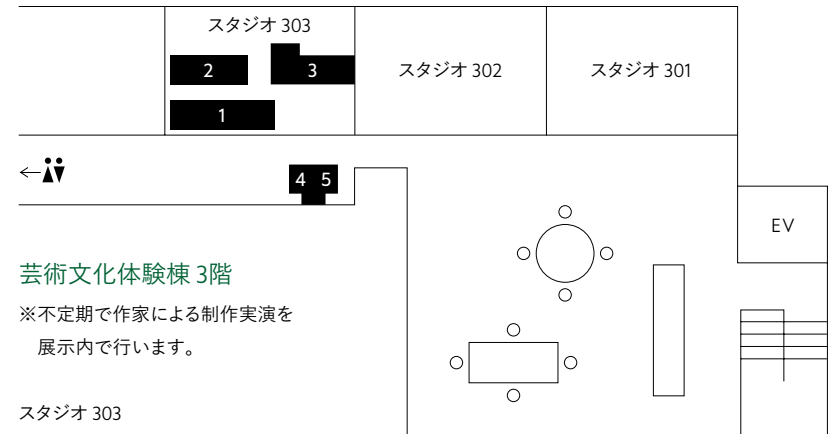
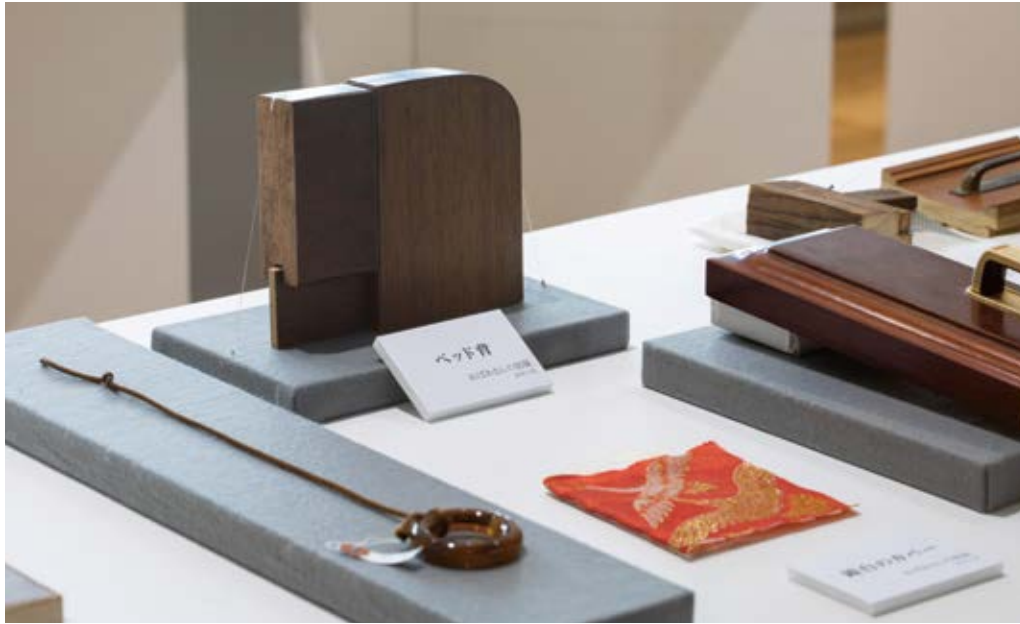
10.02 | sun. 展覧会会期終了、作品搬出。

Exhibition | 展覧会

中尾美園「ある家の図譜」

2022.9.21-10.2





芸術文化体験棟 3階

※不定期で作家による制作実演を
展示内で行います。

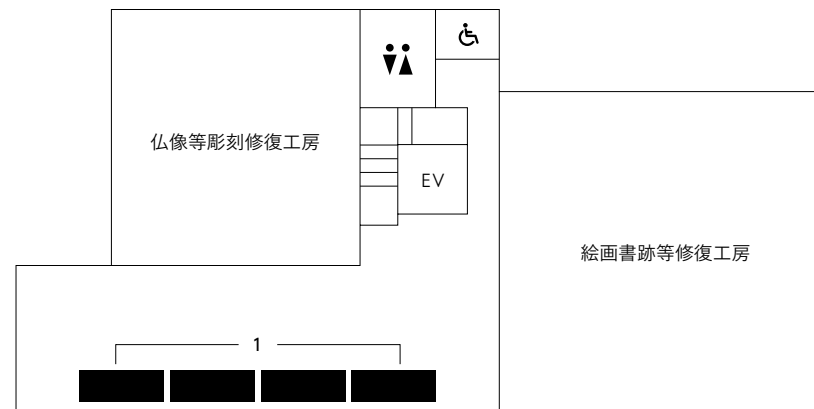
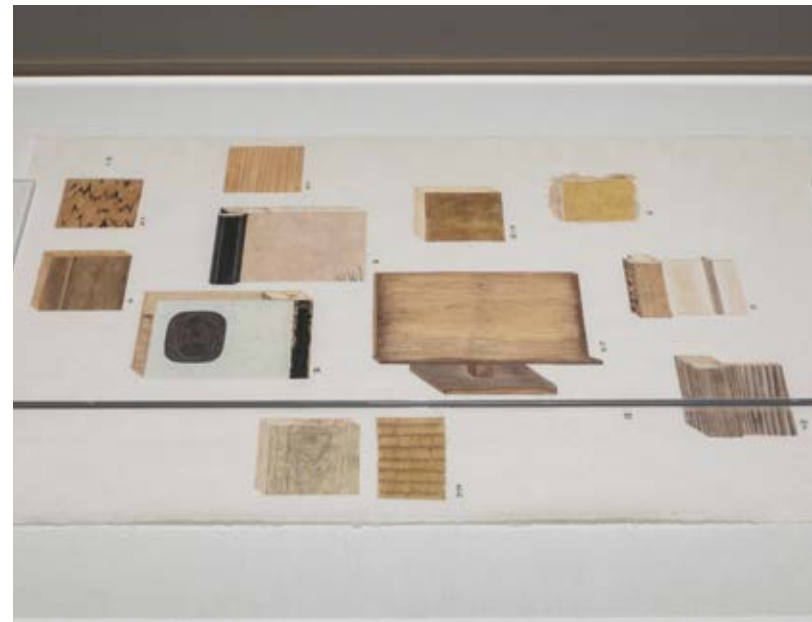
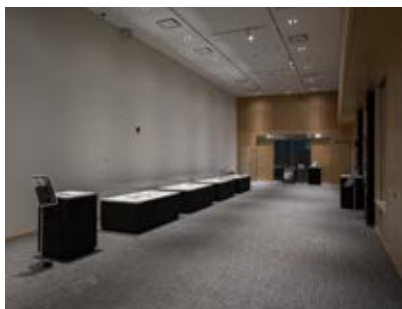
スタジオ 303

- 1 《高橋家住宅資料》
住宅片(昭和～平成時代)、ラベル、展示用品
- 2 未整理資料
- 3 作業台、ラベル、ふえき糊、ハサミ、方眼紙、住宅片、絵具・絵画用品、和紙

廊下

- 4 《ふるう》| 2022年 | 映像27分
- 5 切り抜かれた残りの住宅片

ハンドアウトより抜粋



文化財修復・展示棟 地下1階

1 《高橋家切》| 2022年 | 墨、岩絵具、水干絵具、胡粉、和紙

ハンドアウトより抜粋

安心な図譜

「中尾美園 ある家の図譜」展に寄せて

中村裕太 (美術家)

“WHY DOES LINUS HOLD HIS BLANKET LIKE THAT?”

「なんでライナスは毛布を抱いているの？」

* 4コマ漫画の1コマ目、チャーリー・ブラウンは、毛布を抱き寄せて頬擦りしているライナスを指さし、ルーシーに問い掛ける。

“I'M NOT SURE... I THINK MAYBE IT GIVES HIM

A FEELING OF SECURITY...”

「さあね、安心するためじゃない。」

* 2コマ目、ルーシーは、気のない返事。

“？”

* 3コマ目、おもむろに歩きだしたチャーリー・ブラウンをルーシーが不思議そうに目で追う。

“IT DOESN'T WORK... I FEEL LIKE AN IDIOT!”

「うまくいかない、僕はバカみたいだ！」

* 4コマ目、床に座り込んだチャーリー・ブラウンは、毛布を抱き寄せ、顔を赤らめている。

チャールズ・M・シュルツ『ピーナッツ』| 1954年6月1日

毛布と海水パンツ

ライナスはいつも毛布と一緒にだ。イギリスの小児科医ドナルド・ウィニコットの研究によると、一日中毛布を肌身離さず持ち歩く行動は、母親からの「移行対象」として幼児期にしばしばみられる¹⁾。毛布には、「中間領域」と呼ばれる主観的な世界と客観的な世界をつなぐ役割があり、幼児は毛布をギュッと握りしめたり、もて遊ぶことで「安心」を得ているのである。

そうしたライナスの毛布は、ユクスキュル『生物から見た世界』(1932年)のなかで登場するコクマルガラスの行動を思い起こさせる¹⁾。コクマルガラスは「仲間」に対する意識が強い。だから、道すがら、コクマルガラスを口に咥えて運んでいるネコを見つけると、彼らはけたたましく鳴き、攻撃姿勢をとる。そうかと思うと、人が黒い水泳パンツを持って歩いていると、同じように攻撃姿勢をとるのだ。コクマルガラスにとって「目の前を運ばれていく黒い物体」は仲間を示す知覚像であり、彼らの攻撃姿勢を誘発するのである。こうした行動は、人間という「客体」から見ると滑稽に見えるが、確かにコクマルガラスには水泳パンツが仲間に見えているのだ。ユクスキュルはそうした各々の生物という「主体」からみた知覚世界を「環世界」と呼んでいる。もしかしたら、ライナスにとってその毛布は、他ならぬ仲間にみえているのかもしれない。(たびたび、スヌーピーがその毛布を奪おうと企てている!)

図譜にみるイリュージョン

一方、ここで僕は、そうしたイリュージョンを伴った体験ではなく、もう毛布を抱き寄せても「安心」を得ることが出来なくなったチャーリー・ブラウンに寄り添ってみ



図1 || ネコに対して攻撃姿勢をとるコクマルガラス(上)
水泳パンツに対して攻撃姿勢をとるコクマルガラス(下)
出典：J. Baron Uexküll und G. Kriszat, Streifzüge durch die Umwelten von Tieren und Menschen : Ein Bilderbuch unsichtbarer Welten, Julius Springer, 1934

たい。私たちが彼と同じように、もう一度魔術的な仲間に出会うことは難しいだろう。ならば、私たちは、どうやってモノから安心を得ることができるのだろうか。

ともあれ、ここはモノに愛着を持った人たちについて考えてみることにしよう。世の中には種々様々、奇想天外なコレクションがあるが、そのごく一部の人は、モノを棚の上に飾ったり、布で磨いたりするだけでは満足できず、そのモノを紙に描き写し、その由来を書き添えた「図譜」を作ってきた。もちろんそうした図譜は、近代以降、博物学と結びつくわけだが、江戸時代の図譜なんかをみるとまだまだ系統立っておらず、ある種のイリュージョンを誘発する仕掛けが隠されているように思われる。

烏帽子の折り目

江戸時代後期、曲亭馬琴や山崎美成などの文人たちが集まって、珍しい古書画や古器物を持ち寄り論評し合う「耽奇会」(1824年5月15日-25年11月13日まで20回)が開かれた。今ではその会に持ち寄せられたモノの多くがどこへ行ってしまったのか分からないが、会の様子は、『耽奇漫録』(1824-25年)という図譜から推し量ることができる。僕は、時折二冊組の分厚い復刻本をめくり、「耽奇」という風変わりなものにふけていた彼らの趣味趣向に憧れを持って眺めてきたが、どうもその面白さの源泉はそのモノではなく、図譜の描き方にあるように思えてきた。

『耽奇漫録 二』の第五集には、山崎が「古烏帽子」を出品している|図2|。紙面の中央には烏帽子が大きく描かれ、「古烏帽子 以黒漆紙造之 久我殿領地宮島氏家蔵延徳年間之物云」と添書きが記されている。話は少し逸れるが、耽奇会からおおよそ100年後、三村竹清、内田魯庵などが「新耽奇会」(1928年5月-1936年5月まで12回)を開い



図2 || 『耽奇漫録 二』

出典：国立国会図書館デジタルコレクション | <https://dl.ndl.go.jp/pid/8942920/1/58>

ている。『新耽奇漫録 三巻』(三村竹清作成、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館蔵)に収録された第四回の出品目録には貫井銀次郎が「古製烏帽子 藤貞幹摹」を出品している|図3|。図譜には、『耽奇漫録 二』の烏帽子と同様の添書きがある。加えて国立国会図書館の所蔵本(貫井慈園作成)には、その現物が添付されている|図4|。そうした調査は大沼宜規氏の研究に詳しいが、この二つの会に出品された烏帽子が同一のモノかは定かではない|註2|

ただ、ここで検証していきたいのは、二冊の烏帽子の描き方である。『新耽奇漫録 三巻』では、まるで美術品の現状調書のように、烏帽子の寸法から首に巻きつける紐の長さ、折り目や切りコミまでのコンディションが記されている。(国立国会図書館の所蔵本の図譜は原寸大で描かれ、ほつれまで記している)他方で、『耽奇漫録 二』の烏帽子は、少し丈が長く描かれ、ほつれや紐などが省略されている。それよりも強調されているのは、菱形の模様である。このように『耽奇漫録』には正確にモノを描き写すことが求められているのではなく、解釈に幅を持って描かれていることが分かる。もしかすると、コクマルガラスが海水パンツを仲間として知覚したのと同じように、私たちが折り目を菱形の模様として見違えて知覚することを誘発しているのかもしれない。

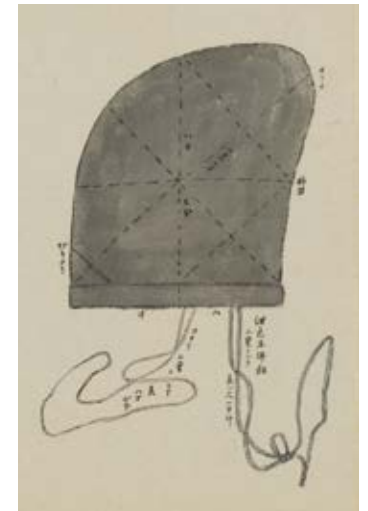


図3 || 『新耽奇漫録 三』

出典：『新耽奇漫録 新耽奇会展—奇想天外コレクション 展覧会図録』早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、2013年
資料番号：イ 40-01524-03



図4 || 『新耽奇会記録』1929年

出典：国立国会図書館デジタルコレクション | <https://dl.ndl.go.jp/pid/2586947/1/8>

御札の染み

さて、こうした図譜にまつわる考察を踏まえ、最後に中尾さんの展覧会と結びつけていきたい。まず、この展覧会の展示空間は二つに分かれている。一つ目の空間には、ガラスケースに収められた中尾さんの三点の《高橋家切》という「図譜」が並べられ、二つ目の空間には、中尾さんがレジデンス期間を過ごしたスタジオのなかに《高橋家住宅資料》という住宅から切り出された「住宅片」が並べられている。(切り出された残りのカケラとその映像も)そのため、「図譜」と「住宅片」を並べて見るができないので、二つの空間を何度も行き来することになる。すると、「なんで高橋家住宅の住宅片を?」とか、「白色タイルの目地まで描いている!」みたいな感想はもうどうでも良くなってきて、コクマルガラスのように「住宅片」と「図譜」の見分けがつかなくなり、フワフワとイリュージョンに掛かったような心持ちになってくる。

そして、そのまま会場を後にしたのだが、やはりもう少しそのフワフワの在り処を探してみたい。まずは《高橋家住宅資料 引き戸 台所 2018-J-46》の「龍泉寺のお札」をよく見てみよう|図5|。引き戸の木材と一緒に四角く切り取られた御札には、「大峯山」と「龍泉寺」と墨書きがあり、修験道の開祖役行者とそのお供の前鬼と後鬼が描かれている。御札は日に焼けているが、油污れはあまり見られないので、おそらくコンロから少し離れた南か東向きの備え付けの引き戸に魔除として貼られていたのだろう。

けれど、そうした推察だけでは埒が明かないので、ここはズルをして、展覧会の記録写真の《高橋家切》の図譜と見比べてみる|図6|。図譜には、御札の図像はもちろんのこと、木材の断面から紙の破れまで克明に記されている。ところが、烏帽



図5 || 《高橋家住宅資料 (部分)》2022年



図6 || 《高橋家切 (部分)》2022年

子のように突き出た岩山の上にある丸い染みが描かれていない!もちろんこの展覧会は報告展なので、制作も途中だと聞いている。だからこれから書き加えるのかもしれない。とはいえ、僕はこの染みが描かれていないことに中尾さんの図譜への解釈を垣間見ることができた。思い切って言うと、中尾さんの図譜には、そのモノがそのモノであるということを安心して知覚するためのイリュージョンが隠されていたのだ。だから僕は安心して会場を後にすることができたのだ。

註1 || 井原成男『ウィニコットと移行対象の発達心理学』福村出版、2009年。

中尾さんは本書を片手に、親子向けワークショップ「モフモフの図譜」の導入でライナスの毛布の話を紹介していた。

註2 || 大沼宜規「新耽奇漫録 好古趣味の記録」『国立国会図書館月報』584号、2009年11月。

『耽奇漫録』および『新耽奇会記録』は国立国会図書館デジタルコレクションのウェブサイトで見ることができる。「個人向けデジタル化資料送信サービス」に申し込むと『新耽奇漫録』も。

中村裕太 | Yuta Nakamura

1983年東京都生まれ、京都府在住。京都精華大学芸術学部准教授。〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点から陶磁器、タイルなどの学術研究と作品制作を行なう。近年の展示に「第17回イスタンブール・ビエンナーレ」(2022年)、「ツボノナカハナダロナ?」(京都国立近代美術館、2020年)。著書に『アウト・オブ・民藝』(誠光社、2019年)。

Mien Nakao

| 前期 | 中尾美園

1980年大阪府生まれ、京都府在住。美術家。

京都市立芸術大学大学院美術研究科保存修復専攻で模写を通して東洋絵画を学ぶ。

近年の主な展覧会にアッセンブリッジ・ナゴヤ2016 現代美術展

「パノラマ庭園一動的生態系にするすー」（ボタンギャラリー、愛知、2016年）、

「うつす、うつる、」（Gallery PARC、京都、2018）、

「SEIAN ARTS ATTENTION 12 Roots Routes Travelers」（成安造形大学、滋賀、2019）、

「ボイスオーバー 回って遊ぶ声」（滋賀県立美術館、滋賀、2021年）等がある。

アーティスト | 中尾美園

グラフィックデザイン | 長砂佐紀子 (SUNA)

展覧会フライヤー写真 | 衣笠名津美

映像撮影・編集 | ヤンキヘ (株式会社アド・ダイセン)

協力 | 一般社団法人 CHISOU

取材協力 | 株式会社 文化財保存

公益財団法人 美術院

天理市教育委員会文化財課

天理大学附属天理参考館

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

歴史に憩う橿原市博物館 (敬称略・五十音順)

Nara Prefecture

Historical and Artistic Culture Complex

Artist in Residence

Documents 2022

Kentaro Onishi

| 後期 | 大西健太郎

Prologue

プロローグ

辺りを360°見渡す、広く山並みが連なる景色。上空を燕が飛んでいます。ここは、とある畑の畦。近くには、かつてそこに集落があったことを今に残す遺跡があります。畑の畦から正南の方を向いて立ちます。東に見える山の少し窪んだあたりから川が流れ下り、やがて現在の農地のすぐ傍まで繋がり、そこ一帯の田畑に水を運んでいます。

「奈良時代から、いやひょっとしたらそれよりも前から、変わっていない景色なのではないでしょうか。」

ある日、リサーチのために訪問した農家さんがそう教えてくれました。古来から栽培されている味間芋(あじまいも)という里芋に似たお芋の収穫を目前に控えていました。

夏は暑く、日照量が多く、それでいて干上がることのない適度な湿りと粘りのある土、近くを流れる水源との距離。きっと、二千年前のお百姓さんもここが農作物の栽培に適した位置だと考えたのでしょう。そして現在、一度は収穫効率のために農業機械の導入を試みましたが、どうしても芋に傷がついてしまうため、近所の農家さん同士総出で手伝い、全て手作業で収穫作業が行われています。

奈良という土地では、千年、二千年という単位は、けして大袈裟な表現ではなく、現在の延長線上に眺めることができる気がしました。時代という単位の変遷はあったにせよ、特殊な装置を使うわけではなく、人が身体を使って土地を見極め、感触を確かめ、連綿と続いてきた何かがあることがどっしりと伝わってきました。

一つ一つ手で芋を収穫することを選択した農家さんたちは、腕まで埋まるほど土の塊の中に手を入れて作業をしています。その手つきには、一寸の迷

Kentaro Onishi

いもありません。非常に細かく丁寧に、それでいて手早く、芋のすき間に指を滑らせ、土を除き、親芋から子芋をもぎ取るのです。私は、その作業風景を見ていて、何かは分からないのですがとてつもなく説得されたのを覚えています。それはまるで、目の前の農家さんたちの手が二千年前の農家さんたちの手と会話しているようだったのです。滞在制作を始めて、数週間が経った時のことでした。

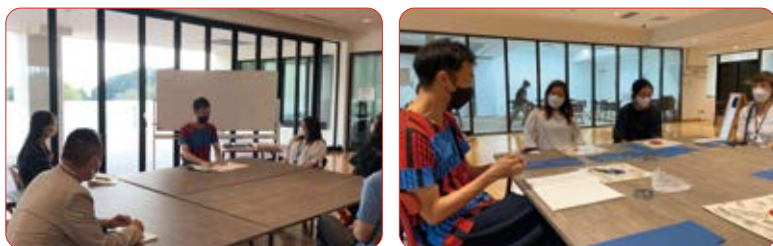
「手」という身体の部分には、頭で理解する「言葉」とは異なる言語体系があるように思いました。「二千年前」という言葉で想像するイメージと、味間芋の収穫作業をしながら(私もお手伝いしました!)手で想像する「二千年前」は、意味することが違うのです。そのことをもっと「手」に聴いてみたいと思いました。

滞在制作を始めた当初、奈良は「むかしから、脈々と続いているものが息づく」土地だなという印象をイメージしました。滞在を経て今、それを私なりに「手」の言語に翻訳すると、「今、まさに生きている」という意味になります。

大西健太郎

Timeline | タイムライン

10.01 | sat. 文化村に到着。プロジェクトチームとともに「手レよむダンス |*1|」ワークショップを行う。アーティストが奈良の地で実現したいと考えていることや、制作の中心となる「手レ譜 (てれふ) |*2|」のコンセプトを共有する。



10.02 | sun. 文化村内の施設を見学。

10.03 | mon. 植和紙工房 |*3| を訪問し、手漉き和紙づくりを体験。「手レ譜」に使用するため、サンプルの和紙を数種類購入。帰り道、浄見原神社 |*4| に参拝。



*1 || 手レよむダンス | 手話をもとにした詩の朗読表現「サインボエム」から着想を得て大西が発案した踊り。

*2 || 手レ譜 | 「手レよむダンス」を踊る際、踊りの譜面となるもの。シンプルな線で土地の風景や作業風景が描かれる。今回の滞在では、手漉き和紙に奈良墨で描いている。

10.04 | tue. 錦光園 (きんこうえん) |*5| を訪問し、にぎり墨 |*6| づくりを体験。



10.05 | wed. 福西和紙本舗 |*7| を訪問。手漉き和紙「宇陀紙 (うだ がみ)」の原料となる楮 (こうぞ) の煮出し作業を見学。サンプルの和紙を数種類購入。

*3 || 植和紙工房 | 2代目が吉野町国栖地区に移り、明治22年には紙漉きをしていた記録が残る。それ以来現在に至るまで、楮を原料とする和紙を流し漉きの手法により生産を続けている。

*4 || 浄見原神社 | 奈良県吉野町南国栖にあり、天武天皇を祭神とする神社。毎年旧暦1月14日を祭礼日と定めて、「国栖奏」(奈良県無形民俗文化財)を奉奏している。

*5 || 錦光園 | 江戸時代より、代々墨職人の家系にあり明治時代、奈良でも由緒ある墨工房から独立・創業し誕生。以来、伝統を守り昔ながらの製法のまま、一つ一つ手作りで「奈良墨」を代々100年以上にわたり作り続けている。

*6 || にぎり墨 | 乾燥前の生の墨を手で握って作る墨。制作者の手の型、指紋が付く世界にただ一つのオリジナルの墨となる。

*7 || 福西和紙本舗 | 6代目福西正行は「表具用手漉き和紙(宇陀紙)製作」選定保存技術保持者であり、奈良県伝統工芸士。当本舗の宇陀紙は国宝や重要文化財、ヨーロッパの文化財の修復にも利用されるほか、国内外の芸術家にも利用されている。

10.17 | mon. 萱生柿オーナー園^{*8}を訪問。地域の特産品である「刀根早生柿（とねわせがき）」の畑を見学。地域の交流を育む耕作放棄地の活用方法や天理と柿の関係性について教わる。



10.18 | tue. 南檜垣営農組合^{*9}を訪問。青大豆あやみどりや、大和野菜^{*10}味間いもの畑を見学。四方を山に囲まれた美しい景色と、空を飛ぶ燕をスケッチする。



^{*8} 萱生柿オーナー園 | 耕作放棄地を解消するため柿の木のオーナーを募集して、復活した柿園。県内外から集まるオーナーに向けて、交流会や品評会の開催が開かれるなど、地域コミュニティの場としても機能を果たす。

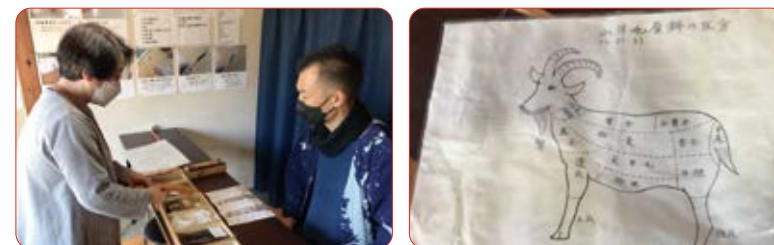
^{*9} 南檜垣営農組合 | 平成18年設立の農事組合法人。遊休地が増え後継者が減っていく中、米・小麦・大豆や大和野菜を中心に作付けし、農家・景観・コミュニティを守るため活動。親子三代が暮らしていける村を目指す。

^{*10} 大和野菜 | 香り・形態・来歴などの特徴をアピールできる大和の伝統野菜と大和のこだわり野菜の中から奈良県によって認定されたブランド野菜。

10.19 | wed. 萱生柿オーナー園でいただいた柿の皮を剥き、干し柿を作る。完成した干し柿は、公演終了後、お世話になった関係者やスタッフにプレゼントされた。干し柿作りで出た皮は後日、ワークショップの素材として使用。



10.20 | thu. 奈良筆 田中^{*11}を訪問。奈良筆^{*12}作りの体験を行う。



10.24 | mon. 奈良県知事、天理市長、奈良県議会議長を表敬訪問。

^{*11} 奈良筆 田中 | 奈良筆は、リス、ムササビ、イタチ、タヌキ、ヒツジ、ウマ、シカなど数種類の動物の毛を巧みに組み合わせる「練り混ぜ法」という作業工程が特徴的。分業ではなく、一連の作業を一人の職人が制作。

^{*12} 奈良筆 | 奈良県奈良市・大和郡山市周辺で作られる筆。制作過程で機械を一切使わず、材料の仕入れから仕上げまでの工程全てを筆匠一人が行う。

10.26 | wed. いちいファーム |*13| を訪問。苺栽培に使用するビニールハウス張りに参加。

10.27 | thu. 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館を訪問後、奈良県高市群明日香村内の遺物や施設を訪問し、高松塚壁画館を見学。次に奈良県立万葉文化館を見学し、奈良を対象に詠まれた和歌から、その歴史的風土などゆかりのある土地を学ぶ。また、当時の人々の風習であった「歌垣（うたがき） |*14|」を知る。最後に、香久山に登る。

10.29 | sat. 空の旅団 |*15| を訪問。手話パフォーマンス演劇を鑑賞した後、劇団の稽古場を見学。劇団員とともに「手レよむダンス」ワークショップを行う。



10.27



10.29

*13 || いちいファーム | 奈良県大和郡山口市で大和丸なすとあすかルビーを育てる。農家の妻であり画家の赤松加奈と大西健太郎の出会いによって、リサーチが実現した。

*14 || 歌垣 | 若い男女が集まって飲食をし、歌の掛け合いによって求婚する奈良時代以前の風習。

*15 || 空の旅団 | 奈良県立ろう学校演劇部OB・OGを中心に構成する手話パフォーマンス演劇集団。2021年4月に持続可能な劇団として「空の旅団」を結成。

11.01 | tue. 奈良での制作専用となる「手レ譜画板」が完成。野外での持ち運びや、移動しながらのスケッチに便利。墨と筆をスムーズに取り出せる仕組みも搭載された。縦横のサイズは、10月に購入した和紙の規格と同じになるよう設計。

11.02 | wed. 有限会社ポニーの里ファーム |*16| を訪問。奈良専用「手レ譜画板」初使用。奈良特産の薬草である大和当帰（やまととうき）畑やキハダ畑での農作業を見学。アニマルヒーリングのパートナーとして大切に飼育されているポニー 2頭の前で「手レよむダンス」を踊る。同日夜、アーティストが滞在しているゲストハウスで同時期に宿泊していたフランスの柔道選手たちに向けて、共同キッチンで食事をしながら「手レよむダンス」を踊る。アーティスト個人としては難しい結果となったが、その後のパフォーマンスに対する意識が変わる契機となる。



11.02



11.01

*16 || 有限会社ポニーの里ファーム | 薬の町として知られる奈良県高取町で薬用作物等の栽培、加工、販売を行う。「農」を通して誰もがイキイキと輝ける居場所づくりをめざし農福連携、6次産業化、まちづくりの事業に取り組む。

11.04 | fri. 天理市聴覚言語障害者福祉協会 |*17| を訪問。天理市在住のろう者や手話サークルのメンバーとともに「手レよむダンス」ワークショップを行う。「手レ譜」に押印するための落款が完成。



11.06 | sun. 南檜垣営農組合を再訪問し、味間いも掘りの作業を見学しながら「手レ譜」を描く。

11.16 | wed. 植和紙工房を再訪問し、作業を見学しながら「手レ譜」を描く。



11.23 | wed. Art-Space TARN |*18| にて公開制作を開始。

11.25 | fri. 清澄の里 粟で大和野菜のフルコースを味わう。

11.27 | sun. 工作×ダンスワークショップ「柿が見た景色」開催。参加者は、柿の皮をつなげて作った「柿眼鏡」をかけることで柿の気持ちを想像しながら、文化村周辺を散策。眼鏡を通して見えた景色をもとに、「手レ譜」を描き、踊りを発表しあった。



11.29 | tue. 文化財修復・展示棟の考古遺物修復工房で作業を見学しながら、スケッチを行う。



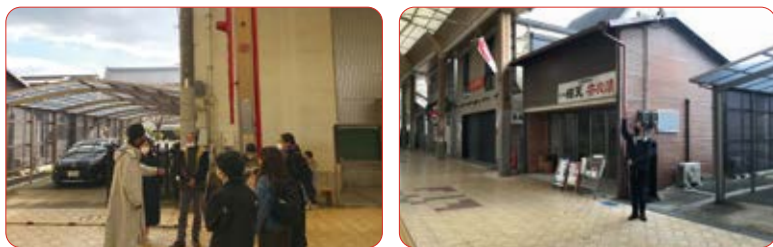
*17 || 天理市聴覚言語障害者福祉協会 | 聴覚障害者福祉の推進のために、天理市内の聞こえない人(ろう者)によって、1969年に設立された。

*18 || Art-Space TARN | 天理本通り商店街の空き店舗をリノベーションしたギャラリー。

11.30 | wed. 文化財修復・展示棟内の絵画・書跡等修復工房で作業を見学しながら、スケッチを行う。

12.01 | thu. 当日配布プログラムの仕様とデザインについて打ち合わせを行う。

12.06 | tue. パフォーマンス会場になる天理本通り商店街 稲田酒造前でリハーサル。舞台装置のテストや交通整理のシミュレーションを行う。



12.09 | fri. 当日配布プログラムの折り作業を行う。

12.10 | sat. ダンスパフォーマンス公演「霧、こんとんとたつて」開催。午前なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3F 交流ラウンジ、午後は天理本通り商店街 稲田酒造前でパフォーマンスを実施。

12.11 | sun.



当日配布プログラム

Performance | ダンスパフォーマンス公演

大西健太郎 手レよむダンス「霧、こんとんとたって」

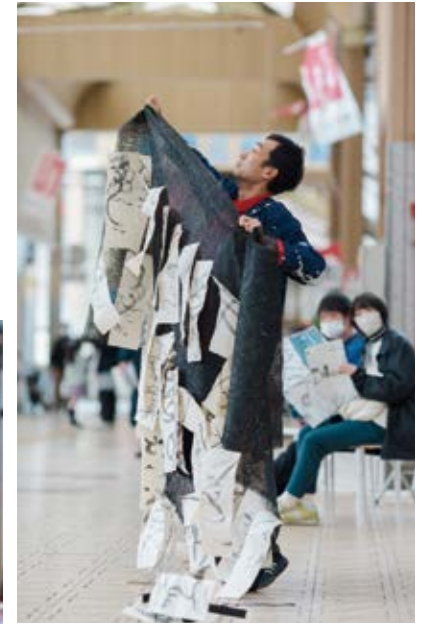
2022.12.10-11



なら歴史芸術文化村
芸術文化体験棟3F 交流ラウンジ







天理本通り商店街
稲田酒造前



分からないから、愛おしい身体

伊藤亜紗（美学者）× 大西健太郎



大西 伊藤さん、お久しぶりです。高校生の頃、伊藤さんが講師を務めていた予備校でお世話になって以来だから、20年ぶりくらいでしょうか。

伊藤 活動は拝見していたので、もっとお会いしているような気がします。今回、奈良で実施した公演のきっかけを教えてくださいませんか。

大西 きっかけは、新型コロナウイルス感染症のパンデミックの時に友人になった、ろうの女性です。彼女との雑談で、「実は、吃（ども）りの癖で母音が吃るから、“オオニシケンタロウ”の“オ”が出にくいんだよね」と話したんです。そうすると彼女が「じゃあ“オ”のとき、指文字の“オ”を手で作って見たら?」と言ってくれた。試してみると、“オ”へ向かうための発音の道筋ができたんです。その時に、手話のすごさを知りました。そこから、手が持っている力や、体の中での手の役割を考え始めことがきっかけです。

その後、予定していたレジデンス先のエクアドルへ渡航できなくなり、活動をオンラインに切り替えたのですが、オンラインの画面を面白いものとして使いたいと考え

た時、手話だったら画面の向こう側に送れるパワーがあるんじゃないかと思い、友人に相談をしました。すると、手話のように意味合いがある言葉ではなく、手の動きで空間を語る「サインポエム^{*1}」を提案してくれました。そこで、「サインポエム」をきっかけに、パソコンの画面が身体の延長として結びつくように意識し、そこに映る言葉の違いやオンライン特有のズレを含みながら、画面全体が大きな束になって踊るという作品^{*2}を2019年に作りました。そこから、手で踊ることがだんだん面白くなってきて、今回の奈良では手そのものの面白さを広げてみたいと思いました。

伊藤 なるほど。手は体の中で特殊で独自の位置を占めていると思います。自分の思い通りに動かせる一方で、同時に自分の意思を離れて手が勝手に動くみたいなこともあって。そういう両側面があることが面白いですよね。手を通して、認識するのは異なる方法で、手を通して分かることがあります。

大西 伊藤さんは何故、障がい特性をはじめ色々な人の身体を観察して、その人の体を通して何かに触れてみたり、いつもとは違う回路でそのものに触れてみたりすることを試みられているんですか。

伊藤 なんてかな。多分、合理的に説明がつかない部分があるからかもしれません。アカデミックな議論は、言葉で普遍化可能な法則や抽象的な概念に落とし込みますが、一方、世界で一回しか起こらないようなことを、小説のような言葉で書いても良い。体は両方の側面を持っていて、法則として語れる部分も十分ありますが、その人の体がそうなっているとしか言い様がない、そこに理由は無い、小説的な部分もある。その両方があることが、すごく面白いですね。全部が合理的に説明できると結構つまらないというか、すぐ飽きちゃうんですけど、理由が無いものは強い。体が持っている理由の無さみたいなものにいつも圧倒されます。

大西 なるほど、理由の無さなんだ。想像していたのと違う答えが返ってきて嬉しい。伊藤さんが面白さを感じるには理由があると僕は思っていました。今はまだ思考が届かない、少し先のことに興味が生まれているんですね。僕自身、奈良では「まだ分からない」ということを手放さずに対話することはできるのか、と当日配布プログラムに記載していたのですが、自らにも問いながら踊りました。

*1 || サインポエム | 手話をもとにした詩の朗読表現。

*2 || パフォーマンス作品「サイン シンフォニー シッチョイサ」 | <https://youtu.be/dnzPuoSXalM>

伊藤 ダンスって、他者との直接的な対話なのか、間接的な対話なのか、どちらなのでしょう。踊っているってこと自体が身体に何かを纏っていて間接的な気もしますが、一般的にはダンスって身一つで直接的なイメージもあります。



大西 僕が「この人、良いダンスをするな」と思うのは、「ダンス」がその人だけのものじゃなく、その人の体に見る側にとっての余白もあり、見る側と一緒に「どうしようかな」と思考できる体で立っている人ほど良いダンスをするなと思います。踊り手の体の中に見る側も一緒に入って、自分だけで完結しないでいられる喜びを、僕自身もダンスを通して体験したい。その体験が、僕の体にとっては必要なんだと思います。自分の中だけのことに収まらない体の状態でいられる時ほど、体がすっきりとリセットされた感覚になる。人から引き上げてもらえる体験ってなかなか無い。自分で完結しない喜びがダンスにはありますね。

伊藤 大西さんのダンスは、いわゆる一般的に想像される「ダンス」のイメージと違いますね。自分一人で踊っているというよりも、何か違うものに動かされている感じがあって、健全なる体の姿のような気持ちよさがあります。それはなんだろう…公演ごとに違う動きが出てくるってことなのかな。

大西 どの動きを切り取るかによりますね。見る側との間に生じる動きに関しては毎回違うこともあり得るし、それが醍醐味だと思います。ダンスは、毎回新しく生まれ直せる。だから視覚的に切り取ったら同じことかもしれないけれど、動かされたものの痕跡をたどると違う経験だった、となるかもしれません。

伊藤 大西さんがパフォーマンス中にちょっと手を動かただけでお客さんは息をのむ、みたいな瞬間も影響を与え合う。その細微な感覚の交換が、手話が単なる手の動きを超えて空間全体をつくりだすことと繋がっているんですね。

大西 障がい福祉施設でのプロジェクトで脳性麻痺の人とダンスをした時に、微細な感覚の交換をととても実感しました。体は動かないけれど、動いているって言葉に



しても大げさじゃないくらい、体が動いて見えるようになる。時間を共にして初めて見えてくる、すごく細かなレベルの交換がありますね。

伊藤 確かに慣れるまでに時間がかかるけれど、慣れてくるとすごく小さな動きでも、相手が何を言わんとしているのか、何がしたいのか、その先に何かがあるのかも含めて結構読み取れるようになりますよね。それが研究の醍醐味かもしれません。色々な言語を知るように、お互いにだんだん分かってくる楽しさがあります。別に研究じゃなくても、人と話すってそういうことかもしれないですね。

大西 それが大西さんにとって、研究のモチベーションになったり、関心に繋がったりしますか。コミュニケーションの扉が開いていくと、もっと扉の奥に行ってみたい！という気持ちになりますか。

伊藤 そうですね。例えば相手がコップの位置を1mmずらした時に、なんでそうしたのかだんだん分かってくるじゃないですか。そういうのが分かってくると、なんだか愛おしい。理解するというよりは、愛おしい、尊い、みたいな感じです。合理性は無いけれど、その人の中では意味がある、というのが体という塊なので。傍から見たらコップの位置を1mmずらすことはほとんど無意味かもしれないけど、その人にとっては必然性がある。今、このコップを絶対にずらさねばならない、という仕組みがそこにあるということが分かると、すごく感動するし、愛おしいし、ほんと素敵!となります。

大西 素敵です。今日は楽しいお話をありがとうございました。

伊藤 こちらこそ、ありがとうございました。

伊藤亜紗 | Asa Ito

東京工業大学科学技術創成研究院未来の人類研究センター長。リベラルアーツ研究教育院教授。MIT 客員研究員 (2019)。専門は美学、現代アート。主な著作に『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(光文社)、『どもる体』(医学書院)、『記憶する体』(春秋社)など。第42回サントリー学芸賞、第19回日本学術振興会賞、日本学士院学術奨励賞受賞。

Kentaro Onishi

| 後期 | 大西健太郎

1985年生まれ、東京都在住。ダンサー／パフォーマンスアーティスト。
その場所・ひと・習慣の魅力を発掘し、それらと出会う過程を通じて「
「ころがおどる」風景を舞台としてパフォーマンス作品を制作する。
住まう地域、国、言語、世代、障がいの有無など、
異なる背景を持つ「他者」との協働を軸として制作過程を含めた
参加型のパフォーマンスプロジェクトを行う。

アーティスト | 大西健太郎

グラフィックデザイン | 佐藤豊

映像撮影・編集 | ヤンキヘ (株式会社アド・ダイゼン)

協力 | 一般社団法人 CHISOU

取材協力 | 植和紙工房、株式会社 文化財保存、萱生柿オーナー園、錦光園、空の旅団
高松塚壁画館、天理市教育委員会文化財課、天理市聴覚言語障害者福祉協会
天理市三島本通り商店街協同組合、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
奈良県立万葉文化館、奈良筆 田中、福西和紙本舗、細川勉強堂、南檜垣宮農組
合 有限会社ポニーの里ファーム (敬称略・五十音順)

Judge's comments | 審査員講評

西尾美也 (美術家 | 東京藝術大学 准教授)

応募プランは多分野からの優れた魅力的なものが多く、これだけ多くの同時代の表現者の方が奈良に、文化村に関心を持ってくださっていることに、奈良で現代美術に携わる者として大変わくわくしました。2名に絞らなければいけないことがとても心苦しかったのですが、審査の結果、以下のお二人が選ばれました。

中尾美園さんは、絵画制作や保存修復で培った技術で視覚的に完成度の高い作品を作っておられるだけでなく、その過程でリサーチを重視することで場と表現を結びつけ、さらに豊かな想像力で歴史と現在をつなげておられる、文化村にまさに歓迎すべきアーティストであると感じました。こうした親和性に加えて、今回の作品プランにおいては、奈良であえて昭和時代の一般住宅をテーマにするなど、意外な着眼点もまた期待を抱かせられました。

大西健太郎さんは、自分自身の身体を場や環境、人にさらすことで、普段見えていないけど意識していないもの、共有しているけど分断されているものに触れ、人の身体を、ひいては人々の関係をやわらかく造形されているように思いました。全国に例のない文化村という環境に大西さんが身を置くことで、ここでしか生まれえない表現と、文化村にとっての新しい関係の造形が生まれることを強く期待しています。

お二人とも第一回にふさわしい方で、滞在制作と成果を今から楽しみにしています。

服部滋樹 (クリエイティブディレクター | graf 代表)

初回公募へ沢山の方々に参加頂けた事、嬉しく思っています。この施設をご覧になった方々ならば、他のAIRとは全く違った環境であることは一目瞭然ではないでしょうか。奈良県の歴史的価値を支えるこの場所で、現代の価値を生み出す様々な作家やチームと共に走り出していきたいと思います。公募へ参加くださった皆様の中でネットワークを築き、ポストコロナのAIRをここから再構したいと思えます。奈良は今まで無かった価値を生み出せる最適な場所であり、作家の可能性を引き出すフィールドを今も昔も持っています。

松本耕士 (なら歴史芸術文化村 プログラムディレクター)

まずは応募いただいた55組の皆様に感謝を申し上げます。想像をはるかに超える数の応募、さらにはその質も非常に高かったことが、審査後の実感です。今回の選考は、当施設の今後の展開へのメッセージになることも意識しながらの作業でした。

前期の中尾美園さんと後期の大西健太郎さん、表現手法等は全く異なるにも関わらず、作品制作に対する考え方に何か共通しているものが想像できる、そのような人選になったと思います。開村したばかりの「なら歴史芸術文化村」において、二人のアーティストが大きな役割を果たしてもらえることを心より期待しています。

一方、残念ながら53組の方が落選となってしまいました。「今回はご縁の無かった方々と、今後も繋がりたい。どうすればよいのか?」そのような宿題をいただいたようにも感じた選考作業でした。

Requirements

なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業 2022年度 OPEN CALL 滞在アーティスト募集要項

募集期間 | 2022年4月19日(火)–2022年5月31日(火)

結果発表 | 2022年6月下旬

滞在期間 | 前期：2022年8月2日(火)–2022年9月26日(月) [56日間]
後期：2022年10月1日(土)–2022年12月18日(日) [79日間]

※滞在期間については応相談

招聘人数 | 前期：1名または1グループ
後期：1名または1グループ

支援内容 | 制作費400,000円、交通費100,000円(上限)、宿泊費6,600円/泊

制作場所 | なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3F スタジオ303

選考方法 | 提出された資料をもとに、なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会
会長が委嘱した各審査委員の審査結果を参考に、主催者がアーティストを選考し、決定する。

応募条件

1. 現在活動している国内在住のアーティスト(表現者)であること(ジャンル不問)。
2. 18歳以上であること。
3. 滞在期間中、奈良県の魅力に触れ、フィールドワークを通じて地域の人々や来村者との交流を積極的に行い、制作すること。
4. 作品の制作場所は原則、なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3F スタジオ303で行うこと。
5. 制作場所は公開されており、来訪者などが自由に見学できるようになっている為、開かれた環境下で制作を行うこと。
6. 滞在期間中に作品を制作し、主催者と協議の上で成果発表を行うこと。
7. 滞在期間中にワークショップやトークイベントなどを開催し、地域の人々や来村者と交流を図ること。
8. 制作、生活において基本的にアーティスト自身で行うこと。
9. 設営から撤去まで主体的に行うこと。
10. 日本語での意思疎通ができること。
11. 健康状態が良好であること。
12. 新型コロナウイルス感染症対応として、Zoomを利用したオンラインミーティングができること。

招聘条件

主催者とアーティストは、以下の条件について、覚書を約定する。招聘条件における主催者からの負担内容は、アーティストが単身で来県することを原則としたもので、基本的に同伴者は不可とし、1グループに対しても単身分の負担内容とする。

1. 来県に関する事項

旅費

- ・主催者は期間中の1回分の往復交通費を支給する。支払い時期は、アーティストが文化村に到着した後とする。上限は100,000円とし、上限を超える交通費はアーティストの負担とする。
- ・原則として、公共交通機関を利用し、居住地の最寄り駅から天理駅間の合理的かつ経済的な経路の鉄道等往復運賃(1回分)を旅費とする。なお、車を利用する場合は奈良県の旅費規程に準ずる。

2. 制作、成果発表に関する事項

制作費

- ・主催者は、制作活動に係る費用として(調査費、材料費、設営費、撤収費を含む)として400,000円支給する。支払い時期はアーティストが文化村に到着後1週間以内とする。

制作場所

- ・なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟3F スタジオ303を使用すること。
- ・自身が必要とする機材、工具などは持参すること。
- ・制作現場の清掃は、アーティストの使用範囲内はアーティスト自身が行うこと。
- ・館内のWi-Fiを使用できるが、PC及び周辺機器の貸出しはしない。
- ・その他館内での規則などを守ること。

成果発表

- ・滞在期間中に成果発表を行うこと。展示や公演など成果発表の会場と会期については、主催者と協議の上で決定する。但し、展示の場合、会期は延べ1週間以上とする。
- ・アーティストと来場者の交流を大切にしたいため、会期中はできる限り会場対応を行うこと(対応日数は相談に応じる)。
- ・設営や撤収の作業は原則としてアーティスト本人が行うこと(補助的作業については要相談)。
- ・成果発表期間中、メンテナンスが必要な場合は、アーティストが責任を持って行うこと。
- ・主催者は、成果発表に係る用品(キャプション、パネル等)はアーティストと協議の上、用意する。
- ・アーティストは原則成果発表終了後、作品を自身で撤去しなければならない。作品を持ち帰る場合の梱包作業及び輸送費はアーティストの自己負担とする。
- ・主催者が記録した写真、映像等の著作権及び公益に資する広報宣伝のためにそれらを使用する権利は主催者に帰属する。主催者及び主催者の了承を受けた者はこれら全てを無償で使用できるものとする。
- ・本事業で制作された作品の著作権と所有権は全てアーティストに帰属する。

3. 取材にかかる指示の遵守

- ・取材する場所、方法及び事前許可について、主催者から特段の指示がある場合、アーティストは必ずこれに従うこと。

4. 滞在生活に関する事項

生活

- ・滞在中の生活費は支給しない。

宿泊

- ・主催者が宿泊先を紹介するが、紹介施設以外の施設に宿泊することも可能。宿泊費は6,600円/泊を上限として支給する。

保険

- ・傷害保険及び、健康保険等はアーティスト自身で加入すること。主催者は保険加入等に関する義務を負わない。
- ・移動手段として、電動自転車の利用（無料）が可能。自転車保険の加入は主催者側で行う。

5. その他

活動記録

- ・主催者は本事業の記録のため、記録集を作成する。
- ・主催者はアーティストの作品及び活動の記録を写真、映像で記録するため協力すること。なお、作成した記録はアーティストにも提供できるものとする。

マスコミ対応

- ・アーティストはマスコミ各社からの取材申し込みがある場合、可能な限り協力すること。制作に支障をきたしたり、プライバシーを侵害されたりする恐れがある場合は主催者に申し出、取材を断ることができる。

サポーター

- ・期間中は必要に応じてスタッフによるサポートを受けることができる。サポート内容については、主催者と協議の上決定する。

新型コロナウイルス感染症等について

- ・状況により、本事業の実施や継続が困難であると判断された場合、主催者とアーティストが状況に応じて協議し、その対応について決定する。

About Nara Prefecture Historical and Artistic Culture Complex

なら歴史芸術文化村について

なら歴史芸術文化村は、歴史、芸術、食と農など奈良県の誇る文化に触れることができる施設です。日本で初めてとなる文化財4分野（仏像等彫刻、絵画・書跡等、建造物、考古遺物）の修復作業現場の公開や、国内外から招いたアーティストとの交流、幼児向けアートプログラムなどを実施しています。

単に見学する、一方向の解説を聞くことだけで終わらず、専門家や他の参加者と対話しながら 知的好奇心を広げて学びを深めるラーニングプログラムを実践。

五感で感じ、様々な人と関わり、体験して、「なぜ?」という新たな問いを生み出すことを大切に、知を探究していく楽しさを提供していきます。



所在地 | 〒632-0032 奈良県天理市袖之内町437-3

開館時間 | 9:00-17:00

休館日 | 月曜日（祝日の場合は翌平日が休館）

交流にぎわい棟

9:00-18:00（月曜営業・レストランは20:00まで）

アクセス | ○JR・近鉄天理駅より直通バス、直通デマンドシャトル運行（有料）○奈良交通バス「勾田」下車徒歩15分

○無料駐車場あり

<https://www3.pref.nara.jp/bunkamura/>



Nara Prefecture
Historical and Artistic Culture Complex

Artist in Residence Documents 2022

なら歴史芸術文化村 滞在アーティスト誘致交流事業
ドキュメント2022

編集 | 飯村有加 (一般社団法人 CHISOU)、北村良子 (なら歴史芸術文化村)

編集補助 | 西尾咲子 (一般社団法人 CHISOU)

監修 | 西尾美也

撮影 | 梅田彩華 (pp. 44, 46 [左, 下], 47 [左], 48 [右], 49 [右下])

衣笠名津美 (pp. 04–05, 15 [上], 18–23, 41 [上], 45, 46 [右上], 47 [右],
48 [左], 49 [右上], 59)

山口健一郎 (pp. 17, 34 [下])

翻訳 | William Andrews (pp. 7)

アートディレクション | 見増勇介 (ym design)

デザイン | 永戸栄大 (ym design)

印刷・製本 | 株式会社 イニユニック

発行 | なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会

発行日 | 2023年3月24日



なら歴史芸術文化村

Printed in Japan

© なら歴史芸術文化村滞在アーティスト誘致交流事業実行委員会